

四季・奈津子

下

quatre saisons

五木寛之



四季・奈津子

下

五木寛之

SAISON

四季・奈津子 下

五木寛之

一九七九年七月十日第一刷発行

一九七九年八月二十五日第五刷発行

定価 七八〇円

発行者 堀内末男

発行所 集英社

〒一〇千代田区三ツ橋二一五・一〇

TEL 〇三・三三〇・六三六（出版部）

TEL 三三八・二七八（販売部）

印刷所 大日本印刷

著者との諒解により検印は廃止します。
乱丁・落丁の本はお取り替えます。

©1979 Hiroyuki Iisaki

Printed in Japan 0093-772204-3041

四季・奈津子

下

16

その晩、わたしたちは午前三時頃まで横浜の酒場で飲みながらお喋りをして時間をすごした。

その店の勘定は中垣昇が払った。

「これからどうする？」

「海を見に行こうよ」

と、酒場の階段をあがって行きながらケイが言った。

「どこへ？」

「公園の遊歩道のところでいいわ。わたし、あの鉄の鎖のぶらぶら揺れるのを手でさわって

るのが好きなの」

「変な話——」

「こっちよ」

ケイは中垣昇とわたしをリードして夜の街を歩いて行つた。その時間になると、大きなビルの並ぶ街並みも、ひっそりと静かだった。街路樹の暗い陰の下を、ケイはひらひらと漂うように動いてゆく。

わたしたちは公園の中を抜け、港にそつた^{ひとけ}人気のない遊歩道に出た。

海は黒く、かすかに重油の匂いがした。大きな貨物船が二隻、こちらに尻を向けて停泊している。遠くに砂をまいたような燈火のつらなりが見えた。

「汚い海——」

と、ケイはうたうように言った。そしてわたしの首筋にひんやりした手を回すと、自分のほうに引き寄せた。

「キスする？」

「うん」

わたしは酔っていたにちがいない。ケイの言葉にまったく抵抗を感じず、彼女のするがままじっと目を閉じて待っていたのだ。

やさしい唇だった。女のひととキスしたのは、はじめてだ。わたしはその時、自分の感覚をたしかめるように、じっとケイのことを頭の中で見守っていた。

「今夜はわたしの部屋に泊んなさい」

と、ケイは言った。

「どうかと思うな」

横から中垣昇がうんざりしたような声で言った。

「おれはもう帰るよ」

「機嫌を悪くすることはないわ」

ケイが片手を中垣昇の首筋に回して、さとすように言った。

「あなたも一緒に泊めてあげる。三人で寝ればいいじゃない」

「おれはいやだね」

「どうして？」

「そういう趣味はないんだ」

中垣昇が本気で腹を立てているのが、その口調でわかった。それも無理からぬことだろう。彼がわたしに男としての好意を示していることは、ケイにも判っていたはずだった。

「きみはどうする？ おれは強制はしないがね」

中垣昇はわたしの目を夜の中からのぞきこんでたずねた。

「ケイの部屋へ泊るか、それともおれのところへ来るか、きみが自分で決めればいい」

「ばかね」

ケイが笑って言った。

「だったらわたしも一緒にあなたの部屋へ行ってもいいのよ。こんなに愉快にやってる三人が、ばらばらになることないじゃない」

「おれはいやだ」

中垣昇はケイの手をふりほどいた。

「ほかのことならケイの言うことを尊重するが、これはちがう。彼女の自由意志を尊重すべきだ。おれか、ケイか、それとも自分ひとりになるか、きみが決めたまえ」

「ケイと一緒に行くわ」

と、わたしは言った。わたしは中垣昇のいらだちが、よくわかっていた。彼のことが嫌いでもなかった。九州に置いてきた達夫に対する遠慮なんかは勿論ない。そしてわたし自身、男と寝ることに対する抵抗感は全くなかった。達夫以外の男を知らないのは、ただ単なる成り行きにすぎない。意識してそれを守ってきたわけではなかった。

「わたし、ケイといろいろ話したいことが沢山あるの」

と、わたしは言った。それは本当だった。とりあえず明日からの身の振り方を決めなければならぬ。人間は遊んで暮しては行けないのだ。働くこと、その方法や、目標や、場所などを早急に決定する必要がある。

わたしは自由だった。どんな選択も、わたし自身にまかされていた。この大きな都会で何を選ぶかは、すべてわたしの意志によって定まるのだ。ケイに相談して、今夜のうちにそれをはっきりさせたかった。中垣昇が考えているほど、わたしは夢みる乙女なんかじゃない。

「そうか」

中垣昇はため息をついてうなずいた。煙草に火をつけると、彼はしばらく黙って暗い海を眺めていたが、やがて指先で煙草を海に向ってはじき飛ばした。

「きみはケイの本当の姿を知らない」

中垣昇は低い声で言った。

「ケイはきみを駄目にしてしまうかもしれない。彼女はきみには効きすぎる。使い方によっては薬にもなるが、彼女は毒薬みたいな女なんだぜ」

「ありがとう」

ケイが言った。

「わたしはあなたのこと、好きよ。でも、それと、これとはちがうわ。一緒にわたしの部屋に泊ればいいのに。あなたの信念に口を出す気はないけど、でも、人間に許されないことなんか何ひとつないわ。神様を信じたり、思想に命を賭けたりすることさえ許される時代だってことを、あなたはちゃんと考えたことがあるの」

「絶対的な自由なんて幻想だ」

中垣昇は早口で反論した。

「人間は何だってやれる。でも、何かをやらないと決心する自由もある。おれはケイのような生き方を自分で選ばない自由を持つてる。そうだろう？」

「そうね」

ケイは疲れた声で続けた。

「好きになさい。人間は、そんなに長くは生きられないんだから。こんな議論をしてる最中にも、一秒一秒わたしたちは死へ確実に歩きつつけているのよ。それ以上たしかな真実ってある？ この一晚、この一日、そこに生きるしか道はないわ。子供みたいに言い争うのは、よしましう」

「わかった」

中垣昇はうなずいた。それから街燈の遠い光の下を、かすかな足音をたてながら、うつむ

いて離れて行った。彼の細い尖った影が、木立ちの中に溶けこんで行くのを、わたしは黙って見送っていた。そのとき、わたしは中垣昇という男を、はじめてとても身近に感じたのだった。

「ここへ座らない？」

と、ケイが海に面した鉄柵にお尻を乗せてわたしを誘った。

「うん」

「人間に許されることが、あると思う？」

ケイが唐突にたずねた。わたしは彼女の言葉をぼんやりした頭で考えた。

「わからないわ」

わたしは正直に答えた。それは本当だった。法律を犯すことと、許されないこととはちがう。これだけは絶対にしてはいけないという、厳しいおきてを自分ははたして持っているのか、と、ケイはたずねているのだ。わたしはその問いに答える自信がなかった。好き、とか、嫌い、とかいった感覚でこれまで生きてきたのだから。

「すこし寒くなってきたわ」

ケイがわたしに体を寄せながらつぶやいた。

「そろそろ引きあげようか」

「そうね」

わたしとケイは腕を組んで歩いた。公園の木立ちの間を抜け、広い道路に出た。

「ヒュウ」

と、口笛を吹く男の子がいた。赤いMGBのオープンカーから、わたしたちを見て手をふっている。

「こんばんは」

と、ケイが声をかけた。

「やあ」

男の子は、十八、九歳に見えるが、実際の年はわからない。頼りなさそうな細おもての少年だ。

「散歩かい、こんな時間に」

と、彼は言った。

「乗らないか、どこへでも送ってやるぜ」

「東京まで運んでくれる？」

「いいとも」

ケイはごく自然な動作でその車のドアをあけ、わたしに目くばせした。

「あなたが座るのよ。そしてわたしを膝の上に抱いて」

「できるかしら」

「おもしろい人たちだね」

男の子はエンジンをふかしながら白い歯を見せて笑った。

「さあ」

ケイがわたしをせきたてた。わたしは男の子の隣りのバケットシートに腰を沈めた。

「いい？」

ケイがわたしの膝の上に小さなお尻を乗つけてきた。

とても軽くて、細い体だった。わたしは両手を彼女の紙のようにうすいおなかの上に回して、しっかりとホールドした。

「いくぜ」

と、男の子は言い、クラッチをつないで派手なタイヤの音を立てながら走り出した。

「東京はどこだい」

「墓地の裏よ」

「墓地だって？ 青山墓地のことかい」

「そう」

「いやなところに送らせやがる」

男の子は首をすくめながら、ギヤをシフトする。かなりの腕だった。信号の合間をぬって、赤いオーブンカーは、深夜の道を重い排気音を立てて走ってゆく。

「重くない？」

ケイがきいた。

「ぜんぜん」

「楽だわ、あなたのクッション」

ケイはわざと背中を倒して、わたしの乳房に背中を押しつけてきた。

「あんたたち、なにしてたんだい」

「散歩よ、ただの」

「いつもあの辺をうろちよろしてるのか」

「あんたは？」

ケイが軽くきいた。

「大した女の子はいないでしょう、あの辺で拾えるのは」

「でもないぜ」

男の子は赤に変る直前の信号をすり抜けながら笑った。

「外人のスケがよく引つかかるんだ」

「そう。よかったわね」

「おいおい、人を坊や扱いするつもりかい」

「だってわたしたち、あんたのおばさま位の大人だもの」

「こわいね」

男の子は腕をのばして、押しハンドルでカーブを曲りながら、

「どっちが若いんだい」

「当ててごらん」

「細いほうが年上だよな。でも、女はわかんないからなあ」

ケイは男の子の肩に手をのばした。首筋になびいている髪を指でもてあそびながら、いい髪ね、と言った。

「あんたの今ののしいことってなに？」

わたしは男の子にきいた。

「たのしいこと？」

「うん、車を飛ばすこと？ それとも女の子を引っかけること？」

「それしかないみたいじゃないか、そんな言い方されると」

「ほかにあるの」

「失礼しちゃうな」

男の子はケイの手を押しやった。

「あんたたちはなんだい。おしえてくれよ」

「わたしはたのしいことなんて持っていないもの」

「へえ。気取ってるね」

「本当よ」

ケイの声には、とても真実味があった。男の子は黙り込み、まっすぐ前方を見てスピードをあげはじめた。すでにわたしたちは第三京浜の広い道に出ていた。速度計の針は、百五十キロ近くを指してこまかく震えている。

「こうしてる時がいいんだ」

と、男の子は言い、なおもアクセルを踏みつづけた。ケイは風圧で吹きとばされそうになり、わたしに抱きついてきた。

「ばかみたい」

と、彼女はわたしの胸に顔を押しつけたまま言った。

「なにもかも、ばかみたい」